主の降誕　（日中のミサ ）　ヨハネ　１：１～１８

ヨハネ福音書は、ルカ福音書やマタイ福音書のように、マリアとヨセフが苦労してイエス様が産まれた経緯を書いていません。神様の壮大な計画を詩的に描いています。「神様の言葉が肉となって私たちの間に宿られた」（14 節）、つまり神様の愛が人間の姿を取ったと書いています。これまで、目で見えない遠い存在だった神様が、ご自分の子を地球に送ったと書いています。このことを「受肉」と言います。イエズス会の創設者イグナチオの霊操に「受肉の黙想」があります。

神様は、ご自分で造られた地球とそこに住む人々を天からご覧になります。白人もいれば黒人もいます。ある人は平和のうちに、ある人は戦争など苦しいさなかにいます。ある人は泣き、ある人は笑っています。健康な人もいれば、病人もいます。生まれたばかりの人もいれば、死に掛かっている人もいます。神様は、人が傷つけたり殺したりしていることに心を痛めます。そして、ご自分の子を地球につかわすことを決心します。長い間もがいてきたイスラエルの民に救い主が生まれます。

人間同士で傷つけ合って苦しむ様子に神様は心を痛めます。そして、ご自分の子を地球に送って下さいます。神様の親ごころ・神様の心の大きさを感じます。ユダヤの人たちは何百年も待ち望んでいました。とても嬉しいことです。ただ、都合の良いことばかりではありません。人間の姿を取るとお腹も空くし、眠たくもなります。がっかりしたり、怒ったりもします。歓迎されて、感謝されることもあれば、嫌われて追い払われてしまうこともあります。実際、イエス様も妬まれて十字架上で殺されてしまいます。

でも、天の上から眺めている神様よりも、一緒に苦しんだり泣いたりしてくれる人（イエス様）がそばにいてくれることがどれだけ心強いでしょうか？

私が司祭として、また園長をしていることも１つの受肉だと思います。歓迎されたり感謝されることもあれば、がっかりさせる原因になることもあります。努力で補えることもありますが、一人の人間には限界があります。　その限界がある人間に、イエス様はなってくださいました。

神様の愛が目に見える形になる。それは、とても嬉しいことです。クリスマスは、喜びいっぱいの時です。赤ちゃんイエス様の目はキラキラしていて、みんなの心を和ませ、希望を与えてくれました。ただ、そこは始まりで、すぐにヘロデ王から命を狙われてエジプトに逃げます。人間の世界の怖さや醜さを見せつけられます。それでも「希望の星」です。場面、場面で、見える姿で神様の愛を伝えていきます。

私たちも、いろいろな難しさがあっても「希望の星」になっていきましょう。天から降りて、私たちと同じ人間になってくださったイエス様をしっかり受け止めましょう。心の支えにしていきましょう。　近くにいてくださる神様を感じましょう。クリスマスおめでとうございます。